

こうして見てくると、もうひとつ疑問に思うことがある。造成で裸地となったところが、三十五年以上の時間のなかでどのような状態になってしまったのかということだ。前に、側溝が土砂で埋まってしまつてミニ扇状地のような状態になり、いわゆる扇端に相当するところが湿地状態になったのではないかと書いたが、そもそも側溝に流れる水はどこからきているのか。

過去の地形図を探してみたところ一九五二年発行の二万五千分の一の地形図があった。まだここが市ではなく村だった頃で、市街地らしきものは見当たらない。つまり素の地形がわかる状態の地図だ。これによると私の住んでいる土地は南北に長い丘陵の頂部近くに位置するようだ。丘陵の頂部からは四方に沢のような筋が確認できる。私の土地がある造成地は、その沢のひとつを何段かに平らに整地してつくられたものようだ。

もうひとつわかつたことは、この南北に長い丘陵の端部には明治以降レンガを生産する工場が盛んにつくられ現在もレンガの産地として名の通つたところだということだ。私の土地も、家をつくる際におこなつた地質調査の結果を見ると三メートル程度の深さまで粘土層だつた。粘土は非常に細かな粒でできた土で、水も浸透しづらい性質がある。

そもそも水はけの良くない粘土が厚くある土地で沢状の地形であれば、雨が降ればそこを水が流れることになる。造成で平らにしてもおそらくその下に粘土層に支えられた水の道が残つていないのだろうか。そういえば、この周りの土地のいろいろなところに小さな池が見られるのだが、それらは水の道から僅かに流れてくる地表には現れない水を溜めたものかもしれない。そしてそれらの池から流れ出る水が側溝に集まり一年中枯れない流れとなっている。そう考えてみると、数万年の月日を経て堆積され、また風雨に削られてできたこの土地の性質は少々人間が造成しても変わらず今も生きているとも言える。そして、人の手が離れ側溝が埋まつたままになつたことによつて、行き場を失つた水がちよつとした傾斜を頼りに僅かな土砂と一緒に土地全体に流れ、常に水の溜まつた湿地のような状態になつていったのかもかもしれない。

造成直後に根をおろした木々も、水はけの悪い土地に適応するハンノキやヤチダモそれにいろいろな種類のヤナギが優勢になり、草花もアシやガマそれに苔のたぐいがあちこちにコロニーをつくつていったのだろうか。枯れた木や草も常に水がある状態では、土になることもできずいわゆる泥炭の状態で粘土層の上に堆積することになる。そうやつて半世紀の時間をかけて今の土地の状態になり、そこに私たちが偶然に出会うことになつた。

そう考えると、単に人が暮らす上で厄介な湿地に出会つてしまつたと言つてしまうのは憚られる。土地は人間の尺度を超えた大きな大きな時間の流れのなかで変わらぬ性質を保ちながら、時としてその形状を変え、その都度多様な動物を迎え入れ生きている。そのほんの一コマに私たちが加えさせていただいている。そう考えるのが自然のような気がしている。

